海外博物館事情 ロシア Foreign Museums

自由と想像
—ロシアの博物館展示が教えるもの—

穆恺黛絲（ムカイダイス）（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　博士後期課程）

サンクトペテルブルクにはロシアが世界に誇るエルミタージュ美術館をはじめ、数多くの博物館や美術館があります。今回は、エルミタージュ美術館の「マンネルヘイム～ロシアの将校・フィンランドの元帥展」、ロシア中央海軍博物館「日ロ文化交流150周年記念・日本の春2005展」、ロシア国立サンクトペテルブルク歴史博物館「長崎原爆展」の3つの企画展示の現地参観を通してロシアの博物館事情を紹介します。

1 国立エルミタージュ美術館

1764年、時の女帝エカテリーナ2世がベルリンから225点の絵を購入し、その保管のためにペテルブルクの王宮・冬宮に付属の別館を造り、エルミタージュ（フランス語「隠棲所」の意）と名付けました。「エルミタージュの宝物を鑑賞しているのは、ねずみと私だけ」とエカテリーナ2世が友人宛てに書いた手紙にあるように、エルミタージュ美術館の始まりは彼女の個人コレクションでした。その後、所蔵品の増加とともに、エルミタージュは幾度も増築され、1764年から1775年にかけて小エルミタージュ、1771年から1787年にかけて大エルミタージュ、1783年にエルミタージュ劇場、1852年2月7日に新エルミタージュがそれぞれ完成しました。1917年の十月革命は、エルミタージュにも大転機をもたらしました。旧ソ連政府の「歴史的記念物の保護と国家への譲渡に関する法令」により、エルミタージュの経営は国家事業となり、旧貴族らの個人コレクションも収納され、その所蔵品の数は飛躍的に増えました。1981年にメンスキー宮殿、1982年、冬宮そのものも博物館の一部として開放されるようになったのです。現在のエルミタージュは、この6つの建物と所蔵品が300万点を超え、イギリスの大英博物館、フランスのルーブル美術館と並んで、世界三大博物館の一つとなりました。一つの所蔵品を見るのに1分かかるとしても、エルミタージュ所蔵品をすべて見るのには15年はかかると言われています。

紹介する最初の展示は、2004年12月25日から2005年6月5日までエルミタージュで催された「マンネルヘイム～ロシアの将校・フィンランドの元帥展」です。フィンランドがロシアの公国だった時代、ロシアの将校として日ロ戦争に参加し、後にフィンランドを独立に導き、フィンランドの初代大統領を勤め、今では「フィンランド建国の父」と呼ばれる彼は、1906年から1908年にかけてサンクトペテルブルクから探索旅行に出発し、中央アジアを通って、西安、北京、日本の長崎、舞鶴にまで来ました。今回は彼の生涯に関する写真や膨大な品々とともに、中央アジアで彼が撮影したウイグル人の写真30点、彼が持ち帰ったとされる、ウイグル人の民族衣装5点が小エルミタージュの一室に展示されていました。ウイグル人の生活、人間関係、食物、服装、笑顔など多岐にわたったそれらの写真は、同じウイグル人の私に当時の社会状況をはっきりと伝えてくれました。時代に翻弄されながら生きていく人間の一瞬の表情をカメラに収め、その表情に焼き付けられた時代を見せてくれる「写真」の持つ力に改めて気付かされ、また「非文字」資料という言葉の意味を自分なりに理解することができました。

2 ロシア中央海軍博物館

ロシア中央海軍博物館はネヴァ川河口に突き出した岬、かつての商品取引所の場所にあり、エルミタージュとは川をはさんだ向かい側に位置します。その歴史はピョートル大帝時代の1709年に船の模型と設計図を保存するために造られた「模型貯蔵室」から発展し、1805年にロシアの海に関係する資料を集めた海事博物館として設立され、1939年8月に初めてロシア中央海軍博物館としてオープンしたものです。そして、ここには1854年に日本に来航したプチャーチン提督とともにディアナ号で下田に来たアレクサンドル・モジャイスキー大尉の肖像画と、モジャイスキーの有名な作品である「下田の情景」、彼が当時の日本を描いた絵25点が丁重に保管されていました。

紹介する二つ目の展示は日ロ友好協会、サンクトペテルブルク国際協力会、日ロ文化交流センター、ロシア中央海軍博物館、ロシア海軍国立文書館などの共催によるもので、2005年3月24日から5月31日までロシア中央海

軍博物館で行なわれた、「日ロ文化交流150周年記念・日本の春2005展」です。ロシア人画家のナターリア・マクシモアがプチャーチン使節団の訪れた場所を2004年10月11日から12月11日の2ヶ月をかけ、その足跡を辿って描いた36点の絵が展示されていました。モジャイスキー大尉とナターリアの絵を見比べることにより、日本の150年前の人々、風景とその現在との対比、そして日ロ交流の長い歴史の流れが理解できます。当時のモジャイスキーの絵は鉛筆で描かれたモノトーンの色であるのに対し、ナターリアの絵は日本を意識した淡い色彩で描かれており、この色を通して「昔」と「今」の記憶が「区別」され、そしてまた時間を越えて見事に「つながれた」新しい試みです。

③ロシア国立サンクトペテルブルク歴史博物館

アングリースカヤ河岸44番地にあるこの博物館は、旧ペテルブルグ博物館（1907年）と市行政局（1908年）のコレクションを基に1918年に造られ、第二次世界大戦下の1941年9月8日～1944年1月27日までの900日間のドイツ軍による「レニングラード包囲」などの第二次世界大戦の記録のほか、20世紀初頭の庶民の生活の様子などが展示されています。

レニングラード包囲で家族すべてを失い、やがて疎開先で自身も亡くなった少女ターニャ・サビチェワの残したメモ「ターニャの日記」もここに保管されています。

紹介する三つ目の展示はこの博物館の常設「長崎原爆展」です。展示には長崎の原爆投下時の写真や被爆した品々とともに、第二次世界大戦下の独ソ戦の写真も展示されていました。展示室の一番目立つ所に大きくヒトラーの無表情な写真が掲げられ、その周りには空撃する爆撃機、被爆した長崎の子供達、長崎の原爆で亡くなったロシア人将校の肖像画や墓などの写真があり、長崎被爆の状況だけではなく、その時代背景と戦時下の国々、戦争に巻き込まれた人々の悲しみが胸に伝わりました。

これらの博物館には展示に関するパンフレットがないため、展示場の学芸員に詳しい解説を求めたところ、「ロシア語が読めるのなら、解説を読んでください」と言われただけでした。ロシアの博物館は、「親切さ」と「丁寧さ」に欠けても、あるテーマに「限定」して、主催者側が意図したものだけを訪れた人に理解してもらうという展示の仕方と違います。限られた予算の中で優雅にそして大胆に、ある「できごと」をその時代背景、歴史の流れ、その時の世界情勢などの大きな枠の中に置き、見る人の想像力を刺激し、全体を通してものごとを理解させるような展示を意図しています。見る人がそこから自由に必要な情報を受け取り、理解を深めていくのです。つまり、それは表面と形式の完璧さをどこまでも追い求める展示の仕方ではなく、「ものごと」の本質に迫る展示方法なのです。

今回の現地調査は、理解に苦しむように高く設定された外国人料金、劣悪なトイレ事情、長すぎる昼休み時間などの旧ソ連時代の習慣がそのまま残されていること、と同時にロシアという国の歴史と文化の奥深さとスケールの大きさを体験できた調査でした。

参考文献

Морской музей России《ИПК Бионт》1993

Государственный Эрмитаж Санкит-Петербург《Альфа-Колор》2000

Миссия В Японию Санкит-Петербург《Ленэкспо》2005

www.spbmuseum.ru

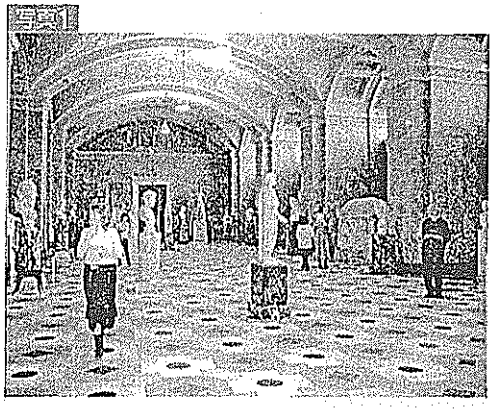


写真1 エルミタージュ美術館展示風景

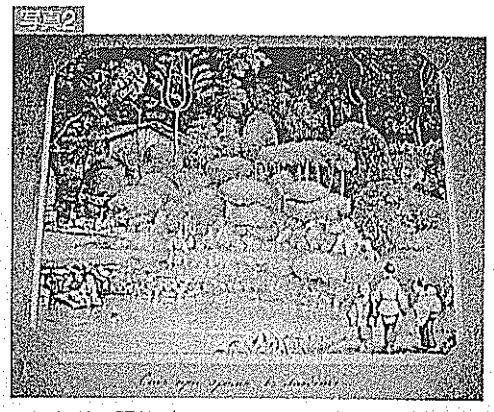


写真2 150年前の函館（ロシア中央海軍博物館）

写真3 「長崎原爆展」より（サンクトペテルブルク歴史博物館）

※写真は全て筆者撮影。

研究会報告

WORKSHOP REPORT

歴史研究と図像資料のデジタル化

孫 安石（事業推進担当者／神奈川大学大学院・助教授）

神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の研究テーマの一つに「文化情報発信の新しい技術の開発」という項目がある。その具体的な内容は、非文字資料の体系化と情報の発信、そして、技術の開発をめぐる非文字資料のデータベース化とデジタル化を検討し、新たな方法論を提示することであり、その理論枠を検討するために2005年4月28日「歴史研究における図像資料のデジタル化」をテーマにしたワークショップが開かれた（http://www.kanagawa-u.ac.jp/06/kouenkai/050414/index.html）。

今回はとくにアジア（東南アジア、中国、日本）と関連の深い分野で歴史資料のデジタル化に関わってきた専門家に報告をお願いし、今後の神奈川大学COEプログラムのための活発な意見交換を行なうことができた。以下、そのワークショップの報告をまとめながら、歴史研究と非文字資料に関連する最新の情報などについて触れておきたい。

1 ワークショップでの報告

柴山守氏（京都大学東南アジア研究所）の報告は今までのコンピュータや情報技術を歴史、地域研究に如何に応用するかについて触れたうえ、実例として最近の地理情報システム（GIS：Geographical Information Systems）により近世日本と東南アジア諸国間の交易がどのように可視化されるのかについて紹介するものであった。[注1]

具体的には、タイ国のアユタヤ、スコタイ遺跡及びアンコールから東北タイを経由してスコタイに至る仏教文化の伝播をGISなどの技術を用いて復元する過程の説明がなされた。また、大阪を描いた元禄、天保時代の地図と現在の地図、そして、航空写真を重ね合わせて3次元で再現した上、琉球、ベトナムの史料を加え、12～19世紀にいたるまでの貿易ルートと文化伝播の動きを可視化する研究について紹介された。

また、手書き文字OCR技術を応用した古文書翻刻支援システムの開発は、文字認識の範囲を近世江戸時代の古文書や現代のくずし字の読み取りにまで進んでいる旨の報告があった。従来の歴史学において豊富な研究成果の蓄積がある文字資料のデジタル化は、図像資料の体系化を目指す本学のCOEプログラムとも密接な関連があり、多くの参加者の興味を引いた。

小野守氏（コンテンツ株式会社）の報告は、歴史資料をデジタル化する際データの解像度、色深度（ビット深度）、資料撮影の技術、画像処理技術の相互性が重要であることを指摘した上、宮城県図書館が所蔵するマテオ・リッチ撰「坤輿萬国地全図」のデジタル化および隠岐・海士町の島全体の情報をデジタル化する過程を紹介するものであった。ZOOMERなどのソフトを用い超高精細画像データを質感や風合いまで自然な状態で再現する技術は、今後、博物館や美術館などに大きく活用されて行くことが期待される。

このようなデジタル技術によって多くの図像資料が細密に復元され、一般の人々が閲覧できるようになれば、歴史学の研究が古色蒼然たるものではなく、地域創生という現代的意味をも合わせもつ可能性があることを示唆するものであった。[注2]

貴志俊彦氏（島根県立大学）は「北東アジア地域研究のための資料・書誌情報データベース」の国際的な拠点をウェブ上で形成する計画を進めており、すでに上海租界工部局警務処文書、北京特別市市政公報、天津史文献目録、スタンフォード大学フーヴァー研究所中国関係アーカイブ、モンゴル人民共和国科学アカデミー刊行人文社会系学術定期刊行物記事索引などをインターネット上で公開している。本ワークショップでは、このうち戦前、日本で発行された膨大な数の絵葉書のなかで、東アジア近現代の風景、人物、出来事などを映し出す約2000点余りの絵葉書を画像データベースとして構築する試みが紹介された。とくに、貴志報告では絵葉書だけではなく、ポスター、広告、商標、画報、写真、地図、映画などのグラフィズム全般に関する研究動向が紹介され、中国、台湾、韓国における絵葉書資料の所蔵状況についても触

れられた。また、このような絵葉書の画像データの利用は従来の歴史研究では分析することができなかった様々な可能性を広げることも指摘された。[※3]

筆者の報告は現在、画像データベースを作成中である『支那事変画報』と『写真週報』などの資料を紹介しながら、これらの画報のなかに含まれた租界関連の情報を蓄積して行く計画について触れたものであった。また、近現代史に関連する図像資料、例えば、新聞や雑誌などに掲載された写真を取り扱うとき、その他の時代とは異なり、読者は一部分の図像のみを記憶するのではなく、ページ全体が一つのイメージとして記憶されることについて言及した。近現代史の場合、人々は図像と文字が融合された新聞と雑誌のページ全体を一つの情報として記憶し、それが時代の記憶として再生産されるからである。

2 図像資料のデジタル化に向けた課題

以上、ワークショップでの報告内容を簡単に紹介した。これらの報告では、(1) 歴史資料をデジタル化する過程で一つの基準を設けることが重要であること、(2) 歴史・文化研究とデジタル化を融合させるためには狭い学際領域をのり超えた共同研究が必要であること、(3) デジタル資料の活用の面では、これらの研究成果が一部の大学や研究機関の内部だけで利用されるのではなく、広く社会一般のための教育プログラムとして活用されるべく、新たな体制を作っていく必要があることなどがこもごも指摘された。

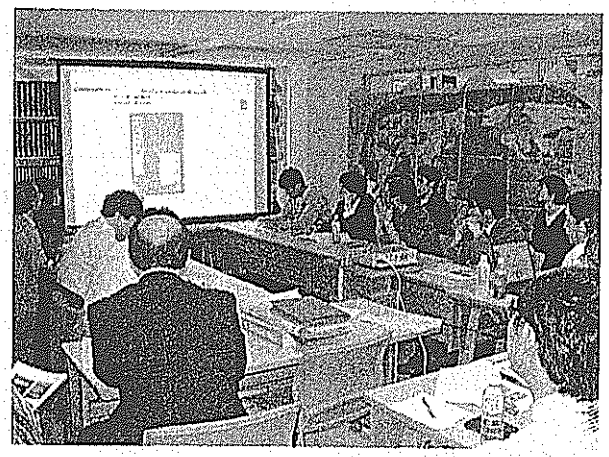
今回のワークショップが終わった後、ECAI (Electronic Cultural Atlas Initiative) Shanghai Conference (上海、復旦大学、2005年5月9日～13日) の「History and Visual Documents panel」に参加する機会を得た。[※4]

ECAI会議はGIS技術を駆使した世界の歴史地理学研究の成果と問題点を検討することを内容とし、今年の上海会議ではとくに中国史に関する地理情報のデータベース化作業について紹介があった。ハーバード大学のイェンチン研究所が進めている中国の仏教遺跡に関するデータベースと上海の復旦大学が推進する中国の歴代の河川の変貌を追跡する地理情報の集積状況の報告の他に、中国の古典経典（儒教・仏教など）をデジタル資料化する作業や言語の勢力範囲の変化を地図上に表す試みなどが報告された。

また、このECAI上海会議では歴史資料のデジタル化に向けた韓国側の取り組みが極めて活発であることを確認することができた。すなわち、欧米と日本などの場合、大学と研究所のスタッフがECAIの会議に参加しているのとは対照的に、韓国からは大学以外にも、政府の文化観光政策を担当する関連部署から人が派遣され、自国の文化遺産に関するデータベース作業の進捗具合が報告された。

ところが、そのほかの関連報告で筆者の関心を引いたのは、Urban GIS Projectsという取り組みであった。このプロジェクトによって、ロンドンと上海、そして、東京など世界の各都市をテーマにした地理情報や図像資料の蓄積が急速に進んでいることを確認することができた。さらに、印象に残ったのは、ECAI会議でも狭い学際の範囲をのり超えた異分野間の交流によって新たな可能性が生まれるという考え方が繰り返し、強調されたことであった。

神奈川大学21世紀COEプログラムは2005年11月に国際シンポジウム「非文字資料とはなにか—人類文化の記憶と記録」を開催する予定であると聞く。そこで提示される新たな試みは、果たしてどのような歴史研究の可能性を示してくれるか、期待したい。



ワークショップ（2005.4.28開催）の様子。

2005年ECAI上海会議の案内（ホームページ ※4より）。

詳細については、以下のホームページを参照。

※1：http://gissv.cseas.kyoto-u.ac.jp/~sibayama/index.html

※2：http://www.contents-jp.com

※3：http://gdb.u-shimane.ac.jp/neardb/top.html

※4：http://ecai.org/Activities/shanghai2005/panel5.html

受贈資料一覧（書籍・雑誌）

タイトル	発行所
小松　遅也著「通訳の英語日本語」	文藝春秋（サイマルインターナショナル　寄贈）
中国古籍文化研究所編「中国古籍文化研究」 第1号 中国古籍文化研究所　説唱文学研究班「烏金寶卷」	中国古籍文化研究所
国立歴史民俗博物館編「歴博」No.122、127、129	国立歴史民俗博物館
国立歴史民俗博物館編「東アジア中世海道」	毎日新聞社（国立歴史民俗博物館　寄贈）
香港大学アジア研究センター編 「亜洲研究中心　Centre of Asian Studies Report 2003-2004年報」	香港大学アジア研究センター
湯　泳詩作「瑞澤香江・香港巴色會」	香港大学美術博物館（香港大学アジア研究センター　寄贈）
林　亦英ほか編「南邦文物　廣東傳統工藝」 林　亦英ほか編「華容世貌　上海博物館蔵明清人物畫」 黄　燕芳編「聚盈留香　攻玉山房蔵中国古代書畫」 彭　綺雲編「海貿流珍　中国外銷品的風貌」	香港大学美術博物館
「愛知学院大学文学部紀要」第34号	愛知学院大学文学会
「博物館学芸員課程　年報」第5号	桜美林大学　資格・教職教育センター博物館学芸員課程
「F-GENSジャーナル」No.3	お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 「ジェンダー研究のフロンティア」
COE研究雑誌「先端社会研究」創刊号 第3回国際シンポジウム成果報告書	関西学院大学大学院社会学研究科21世紀COEプログラム 「人類の幸福に資する社会調査の研究」
国際シンポジウム論文集	九州大学大学院芸術工学研究院21世紀COEプログラム 「感覚特性に基づく人工環境デザイン研究拠点」
ニューズレター「漢字と文化」特集号	京都大学21世紀COEプログラム 「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点 —漢字文化の全き継承と発展のために—」
ニューズレター　No.6、7	京都大学大学院法学研究科21世紀COEプログラム 「21世紀型法秩序形成プログラム」
国際共同研究企画セミナー報告書	B-2「市場」班
「FRONTIER NEWS」No.9、10 「統合創薬の開拓」キックオフシンポジウムプログラムと資料 拠点形成概要	京都薬科大学創薬科学フロンティア研究センター 21世紀COEプログラム 「伝承からプロテオームまでの統合創薬の開拓」
ニューズレター　No.3	近畿大学21世紀COEプログラム 「クロマグロ等の魚類養殖産業支援型研究拠点」
CIRMニューズレター　No.7、8、9 平成15年度成果報告書「心の解明に向けての統合的方法論構築」	慶応義塾大学21世紀COEプログラム 「心の統合的研究センター」
ニューズレター　No.4 欧文紀要　No.3	慶応義塾大学21世紀COEプログラム 「多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成 —多文化世界における市民意識の動態—」
シンポジウム報告書「神道の連続と非連続」	國學院大學21世紀COEプログラム 「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」
研究会2004年度報告書「神道と修験道—民俗宗教思想の展開—」	第Ⅱグループ「神道・日本文化の形成と発展に関する調査研究」
ニューズレター　No.1	静岡大学21世紀COEプログラム 「ナノビジョンサイエンスの拠点創成」
「東洋學」第三十七輯	樞國大學校東洋學研究所

（2005年3月～5月）

タイトル	発行所
「28の研究教育拠点」全拠点案内パンフレット	東京大学21世紀COE
『死生学研究』2004年秋号、2005年春号 シンポジウム報告論集 『死生観と心理学』 『DALSニューズレター』No.8	東京大学21世紀COEプログラム 「生命の文化・価値をめぐる『死生学』の構築」
ニューズレター　No.3、4	東京大学大学院21世紀COE 「心とことば―進化認知科学的展開」
文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」採択記念フォーラム報告書	東京女子大学「女性学・ジェンダー的視点に立つ教育展開「女性の自己確立とキャリア探究」の基礎をつくるリベラル・アーツ教育」
言語情報学研究報告5　「第二言語の教育・評価・習得」 言語情報学研究報告6　「自然会話分析と会話教育 ―統合的モジュール作成への模索―」	東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」
『史資料ハブ　地域文化研究』No.4	東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム 「史資料ハブ地域文化研究拠点」
拠点形成概要（和・英文）	東京工業大学21世紀COEプログラム 「フォトニクスナノデバイス集積工学」
ニューズレター『Wind Effects News』No.6	東京工芸大学工学研究科　風工学研究センター
拠点形成概要	東北大学大学院薬学研究科21世紀COEプログラム 「医薬開発統括学術分野創生と人材育成拠点」
研究報告集『Annual Report 2003』	東北大学21世紀COEプログラム 「バイオナノテクノロジー基盤未来医工学」
『JISMOR 一神教学際研究』 『CISMOR VOICE』No.2	同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）
広報誌『melting pot』No.2	独立行政法人　物質・材料研究機構　若手国際研究拠点
研究報告書『2003 Annual Report』	豊橋技術科学大学21世紀COEプログラム 「未来社会の生態恒常性工学」
『科学の新しい潮流―計算科学フロンティア』	名古屋大学21世紀COEプログラム 「計算科学フロンティア」
ニューズレター「奈良と古代」No.1、2 報告集『古代日本語を読む』No.1 国際講演会資料『東アジアの古代都市』	奈良女子大学21世紀COEプログラム 「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」
ニューズレター『雙松通訊』創刊號	二松学舎大学21世紀COEプログラム 「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」
CNERパンフレット	一橋大学21世紀COEプログラム 「ヨーロッパの革新的研究拠点：衝突と和解」
シンポジウム報告書『日中の文化関係を考える―相互認識の「ずれ」を中心に―』	法政大学国際日本学研究センター
MKCRニューズレター　No.2	武庫川女子大学関西文化研究センター 「関西圏の人間文化についての総合的研究」
国際シンポジウム論文集	横浜国立大学大学院工学研究院21世紀COEプログラム 「情報通信技術に基づく未来社会基盤創生」COE
『演劇研究センター紀要』Ⅳ、Ⅴ	早稲田大学21世紀COEプログラム 「演劇の総合的研究と演劇学の確立」

主な研究活動

2005年度　研究推進会議

■第1回　4月15日（研究推進会議委員の交代、COE研究員（RA）の選考、中間評価のヒアリングの実施及び各関係調書等の提出について　他）

■第2回　4月20日（研究拠点形成費の実績報告書、中間評価ヒアリング提出資料、国際シンポジウム実施計画案について　他）

■第3回　5月25日（情報発信及び実験展示・高度学芸員養成に関するワーキンググループ編成、海外提携機関への若手研究者派遣、COE研究員（RA）の指導教授について　他）

2005年度　全体会議

■第1回　5月13日（中間評価ヒアリング報告、研究拠点形成費の実績報告書、本年度研究実施計画について 他）

2005年度　研究会　（2005年4月～5月実施分）

全体

■第1回・5月13日　各班リーダー／昨年度の総括と本年度活動目標について
八久保 厚志／『環境と景観の資料化と体系化にむけて』を発行して

班

■4月4日・1班　ジョン・ボチャラリ／昨年度の英文翻訳作業の経過と問題点

■4月15日・1班　今年度の東アジア生活絵引の編さんのための図像読み取り作業

■4月27日・2班　川田 順造／人力運搬の方法、回転道具の回転方向など、道具と身体技法についての問題提起

■5月12日・4班　木下 慶子（工学部木下研究室）／非文字資料による情報資源と情報流通の管理

■5月25日・1班　『常民生活絵引』マルチ言語版の編さんのための翻訳成果の検討

■5月25日・2班　河野 通明／非文字資料体系化の方法論をめぐって

ワークショップ

■4月28日　「歴史研究における図像資料のデジタル化」　（研究会報告 P.24、25参照）

◇主催：外国語学研究科中国言語文化専攻、神奈川大学21世紀COEプログラム
◇共催：神奈川大学　人文学会

- 司会：大里 浩秋（神奈川大学）

■柴山 守（京都大学東南アジア研究所）
情報技術と歴史・文化研究―空間情報としてみる非文字資料―

■小野 博（コンテンツ株式会社）
非文字資料の大規模デジタルアーカイブと先端技術

■貴志 俊彦（島根県立大学）
近代東アジアの文字／非文字資料のデジタル化と公開利用

■孫 安石（神奈川大学）
戦争と画報―「支那事変」関連の画報と租界

主な研究活動

現地調査

（2005年1月～5月実施分）

福田 アジオ、菊池 勇夫、君 康道、金 貞我、田島 佳也、中村 ひろ子、富澤 達三	
宮城県仙台市（1月21日～22日）	
宮城学院女子大学、宮城県美術館、東北歴史博物館他での現地調査、および近世・近代生活絵引きの編さんのための研究会の開催	
山口 建治	奈良県奈良市・兵庫県神崎郡・大阪府三島郡（2月3日～5日）
興福寺・日本玩具博物館・伏偶舎郷土玩具資料館等での追灘行事と人形博物館の現地調査	
田島 佳也	北海道 札幌・帯広（3月4日～8日）
十勝毎日新聞社、開拓記念館、北海道大学附属図書館北方資料室でのアイヌ絵の調査・収集	
彭 国躍	中国 上海（3月17日～23日）
復旦大学・華東師範大学での色彩意味論に関する社会言語学術研究の実施	
河野 通明	山口県岩国市・光市他（3月21日～24日）
岩国市民具収蔵庫・光市歴史民俗資料館・本郷村歴史民俗資料館他での在来農具の比較調査	
小馬 徹	ケニア ナイロビ他・イギリス ロンドン他（3月20日～31日）
ケニアのナイロビ市を中心に勃興している新たな混成語であるシェン語の現地参与観察調査、および文献調査	
佐野 賢治、孫 安石、中村 政則、網野 暁	福島県南会津郡（3月26日～29日）
只見町教育委員会で民俗民具資料の現地調査および資料・データ・検索化の検討	
夏 宇継	中国 雲南省麗江市（4月1日～9日）
納西族の東巴・求寿儀式の調査	
河野 通明	静岡県三島市・藤枝市・島田市（4月14日～15日）
三島市郷土資料館・藤枝市郷土博物館・島田市博物館他での在来農具の比較調査	
金 貞我、田島 佳也、中村 ひろ子、前田 禎彦	千葉県佐倉市（5月6日）
国立歴史民俗博物館での江戸図屏風原本の見学と図像史料の処理についての聞き取り調査	
北原 糸子	ロシア サンクトペテルブルク（5月16日～21日）
ロシア中央海軍博物館他でモジャイスキーの「下田の情景」（1854年当時）等についての現地調査	
廣田 律子	秋田県田沢湖町（5月22日～23日）
わらび座デジタルファクトリーにて能楽師関根祥人氏の動きを対象にモーションキャプチャーによるデジタル資料の収録	
河野 通明	長野県長野市・千曲市・小布施町他（5月26日～28日）
長野県立歴史館、長野市立博物館、小布施町歴史民俗資料館他での在来農具の比較調査	
金 貞我	香港（5月26日～29日）
香港大学博物館での所蔵品（絵画中心）の見学と調査	

2005年度 研究担当者紹介（事業推進担当者・COE教員・共同研究員）

・各班リーダー（●印）以下、五十音順　・共同研究員（※印）　・2005年4月現在

	氏名	所属部局・役職	専門分野
1班	●福田 アジオ	歴史民俗資料学研究科　教授	民俗学
	菊池 勇夫　※	宮城学院女子大学学芸学部　教授	日本近世史・北方史
	君 康道　※	東京大学大学院総合文化研究科　専任講師	日本民俗学
	金 貞我　※	韓国　延世大学博物館　客員研究員	日本絵画史・東洋美術史
	佐々木 聡　※	東京都立大学（首都大学東京）人文学部　助教授	中国文学（古典文学・幻想文学・表象論）
	鈴木 陽一	外国語学研究科中国言語文化専攻　教授	明清白話小説史・江南地域文化
	田島 佳也	日本常民文化研究所　教授	日本近世経済史
	中村ひろ子	神奈川大学21世紀COEプログラム　COE特任教授	博物館学・民俗学
	西 和夫	日本常民文化研究所　教授	日本建築史
	ジョン・ボチャラリ	東京大学大学院総合文化研究科　教授／歴史民俗資料学研究科　非常勤講師	比較文学比較文化・日本研究
	前田 禎彦　※	歴史民俗資料学研究科　専任講師	日本古代史・中世法制史
2班	●川田 順造	歴史民俗資料学研究科　教授	人類学
	芦澤 玖美　※	大妻女子大学人間生活科学研究所　教授	生物人類学・成長学
	落合 一泰　※	一橋大学大学院社会学研究科　教授	文化人類学・ラテンアメリカ研究
	夏 宇継　※	歴史民俗資料学研究科　非常勤講師	中国民俗学
	河野 通明	日本常民文化研究所　教授	農業技術史
	長瀬 一男　※	株式会社わらび座　チーフディレクター	民族芸能のデジタル記録
	廣田 律子	歴史民俗資料学研究科　教授	中国民俗学・祭祀演劇
	山口 建治	外国語学研究科中国言語文化専攻　教授	中国民間文芸
3班	●菅月 洋一郎	日本常民文化研究所　教授	民俗学
	北原 糸子	歴史民俗資料学研究科　非常勤講師	日本近世・近代社会史
	鈴木 廣之　※	東京文化財研究所　日本東洋美術研究室長	日本美術史
	須山 聡　※	駒澤大学文学部　助教授	人文地理学（文化地理学）
	西井 正浩　※	工学部　専任講師	建築計画・設計
	中島 三千男	歴史民俗資料学研究科　教授	日本近現代思想史
	八久保 厚志　※	外国語学部　助教授	人文地理学
	浜田 弘明	桜美林大学資格・教職教育センター　助教授／COE教員（非常勤講師）	文化地理学・博物館学
	三鬼 清一郎	歴史民俗資料学研究科　教授	日本近世史
4班	●佐野 賢治	歴史民俗資料学研究科　教授	民俗学
	宮木 俊也	松戸市立博物館　学芸員／COE教員（非常勤講師）	日本民俗学
	宇佐見 義之　※	工学部　助教授	物理学
	大里 浩秋	外国語学研究科中国言語文化専攻　教授	中国近代史・日中関係史
	金子 隆一　※	東京都写真美術館　学芸課専門調査員	写真史
	橋川 俊忠	歴史民俗資料学研究科　教授	日本政治思想史
	木下 宏揚　※	工学研究科電気電子情報工学専攻　教授	情報セキュリティ・著作権制御・画像工学
	小馬 徹	歴史民俗資料学研究科　教授	文化人類学・社会人類学
	齊藤 隆弘	工学研究科電気電子情報工学専攻　教授	画像処理・情報数理
	孫 安石	外国語学研究科中国言語文化専攻　助教授	中国近代史・都市史
	田上 繁	歴史民俗資料学研究科　教授	日本近世経済史
	中村 政則	歴史民俗資料学研究科　教授	日本近・現代史
	能登 正人　※	工学研究科電気電子情報工学専攻　助教授	計算機科学・システム情報工学・人工知能
	的場 昭弘　※	経済学研究科　教授	社会思想史・社会史
	丸山 宏　※	筑波大学人文社会科学研究科　教授	中国宗教史

COE研究員紹介

	氏名	所属部局・役職	専門分野
PD	樫村 賢二	神奈川大学21世紀COEプログラム／COE研究員（PD）	民俗学
	藤永 豪	神奈川大学21世紀COEプログラム／COE研究員（PD）	人文地理学
	丸山 泰明	神奈川大学21世紀COEプログラム／COE研究員（PD）	民俗学・宗教学
RA	王 京	歴史民俗資料学研究科博士後期課程　在学／COE研究員（RA）	民俗学・日中関係史
	小林 光一郎	歴史民俗資料学研究科博士後期課程　在学／COE研究員（RA）	民俗学
	土田 拓	歴史民俗資料学研究科博士後期課程　在学／COE研究員（RA）	民俗学
	彭 偉文	歴史民俗資料学研究科博士後期課程　在学／COE研究員（RA）	民俗学
	宮本 大輔	外国語学研究科中国言語文化専攻博士後期課程　在学／COE研究員（RA）	中国社会言語学

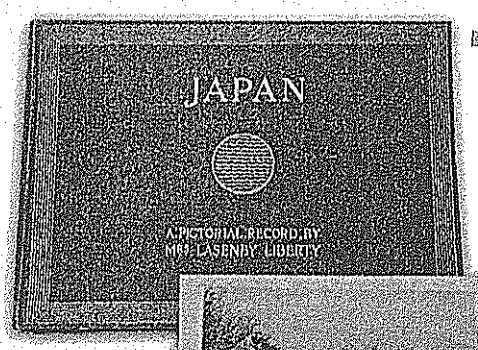
調査研究協力者

本プログラムの調査研究活動を支援していただく、
COE調査研究協力者に今年度委嘱された方々です。

2005年5月現在

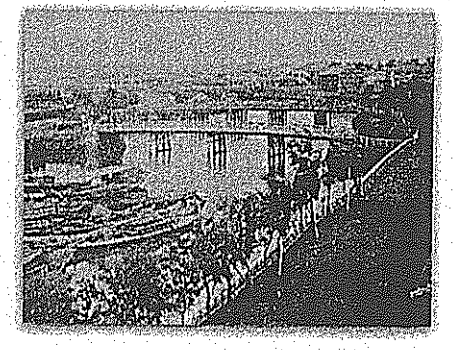
班	氏　名	所属部局・職名
1	鈴木　彰	神奈川大学外国語学部　助教授
1	中井　真木	東京大学大学院総合文化研究科博士課程　在学
1	コールマン・ティモシー	東京大学大学院総合文化研究科修士課程　在学
1	金　泰順	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士前期課程　在学
1	林　淑姫	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程　在学
2	海賀　孝明	株式会社わらび座　チーフエンジニア
3	河野　眞知郎	鶴見大学文学部　教授
3	津田　良樹	神奈川大学工学部　助手
3	原信田　實	国際浮世絵学会会員、2003年度神奈川大学21世紀COEプログラム共同研究員
3	増野　恵子	早稲田大学教育学部　非常勤講師、2004年度神奈川大学21世紀COEプログラム共同研究員
4	賀志　俊彦	島根県立大学総合政策学部　助教授
	富澤　達三	神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員、2004年度神奈川大学21世紀COEプログラム研究員（PD）

貴重資料の紹介



「The Top of the Pass between Nikkô and Lake Chûzenji」
（写真左下）
Mrs. Lasenby Liberty　*Japan a Pictorial Record*
（Adam and Charles Black、1910）より

「居留地（旧横浜新田）」（写真右下）
横浜と近郊の風景写真（撮影者不詳、明治8年頃撮影）
計6点のうち1点



貴重資料の紹介 ※2004年度に購入した資料

2005年3月退任の研究担当者

COE共同研究員

彭　国躍　楠本　彩乃　田口　洋美　増野　恵子

COE研究員（PD）

綱野　暁　富澤　達三

COE研究員（RA）

大坪　潤子　大西　万知子　中町　泰子

2005年度海外提携機関の派遣研究員・訪問研究員

本プログラムより派遣・招聘される若手研究者は、約2週間をそれぞれの研究課題にそって現地調査を実施します。今年度（前期）で選考されたのは、下記の派遣研究員2名、訪問研究員1名です。

派遣研究員

氏　名：王　京　COE研究員（RA）
派遣先：北京師範大学
　　民俗学与文化人類学研究所
期　間：2005年7月6日～7月19日

氏　名：彭　偉文　COE研究員（RA）
派遣先：華東師範大学
　　中国民俗保護開発センター
期　間：2005年9月17日～9月30日

訪問研究員

氏　名：岳　永逸（北京師範大学民俗学与文化人類学研究所教員）
受け入れ期間：2005年7月15日～7月28日

編集後記

中間評価の結果待ち、外部評価ばやりとはいえ通信簿を待つ小学生気分の中での編集作業。箱根駅伝ではないが折返し地点での成績は後半に響く。次号より調査・研究の紹介から、その成果に基づいた論考、ワークショップやシンポジウムの内容で紙面を構成、研究の最前線を特集のような形で紹介していきたい。各研究員のスパートに期待するところ大である。
（佐野）

3年目の今年は、新しく始まる活動や、今までの研究活動の成果を発表していく節目の年です。本誌の表紙は新年度を機に気分一新、緑色に変わりました。今までの茶、青、そして今年度の緑、というように、年を追うごとに違う特色が出せるよう、これからも誌面の工夫を心がけていきたいと思います。
（関）

Report&Information

神奈川大学21世紀COEプログラム 第1回 COE国際シンポジウム

COEプレシンポジウム
「版画と写真—19世紀後半 出来事とイメージの創出—」

■日時：2005年11月20日(日)10:30~12:00、13:30~16:30
■会場：神奈川大学横浜キャンパス　セレストホール
■内容：基調講演　木下直之（東京大学　教授）
「写真は出来事をどのようにとらえてきたか」

各発表、パネルディスカッション　司会 北原糸子（神奈川大学　講師）

「『名所江戸百景』における構図の新解釈」
原信田寶（国際浮世絵学会会員）

「変貌する明治の図録」
鈴木廣之（東京文化財研究所　東洋美術室室長）

「内田九一の西国巡幸写真」
金子隆一（東京都写真美術館　専門学芸員）

「アマチュア写真家徳川昭武が見た世界—私的写真をめぐって—」
斉藤洋一（松戸市戸定歴史館　学芸員）

「見える民族、見えない民族—『輿地誌略』の世界観—」
増野恵子（早稲田大学　講師）

COE国際シンポジウム
「非文字資料とはなにか—人類文化の記憶と記録—」

■日時：2005年11月26日(土)~27日(日)　10:00~17:00
■会場：神奈川大学横浜キャンパス　セレストホール
■内容：基調講演　川田順造（神奈川大学　教授）
「非文字資料から見る人類文化」

セッションⅠ
「記号と写実—19世紀後半メディアがもたらした衝撃—」

セッションⅡ
「身体技法と祭祀芸能—宗教者の動きと人形の動きから—」

セッションⅢ
「民具と民俗技術」

セッションⅣ
「非文字資料の情報化と教育」

※日・英・中　同時通訳

同時開催 企画展示
「浮世絵における常識と非常識—復刻版でみる『名所江戸百景』」
■日程：2005年11月18日(金)~30日(水)
■会場：神奈川大学横浜キャンパス　常民参考室

■主催：神奈川大学21世紀COEプログラム
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」

刊行物や催し物については該当する各所にお問い合わせください。　045-481-5661（代）
●日本常民文化研究所（内線4358）●歴史民俗資料学研究科（内線4024）
●中国語共同研究室（内線4525）●COE支援事務室（内線3532）

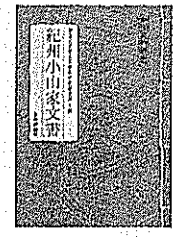
COE新刊案内

調査研究資料2
『図像文献書誌情報目録』

近代の大量印刷された出版物に復刻・翻刻・再録等された図像資料の書誌情報。各資料がどのような機会にどの文献に再録されたかを知るための目録。
2005年3月発行、A4判　409ページ。
■編集：人類文化研究のための非文字資料の体系化　第1班
■発行：神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議

日本常民文化研究所

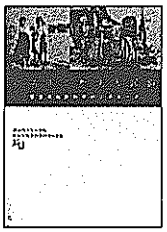
『水産総合研究センター所蔵古文書目録
—千葉県（房総半島沿岸地域）関係史料—』
2005年3月発行、A4判　136ページ。
■編集・発行：
独立行政法人水産総合研究センター
神奈川大学日本常民文化研究所



常民資料叢書『紀州小山家文書』
2005年4月発行、A5判　418ページ。
■編集：神奈川大学日本常民文化研究所
■発行所：日本評論社　■定価（本体8,000円+税）

歴史民俗資料学研究科

『対話する歴史と民俗
—歴史民俗資料学のエチュード』



研究科創立以降10年間に作成された修士論文を基礎に書かれた10本の論文を収録。
2005年3月発行、A5判　260ページ。
■編集：歴史民俗資料学研究科
■発行：神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議

外国語学研究科　中国言語文化専攻

ワークショップ「祓いの儀礼と技法」
■日　時：2005年7月23日（土）13:30~16:00
■会　場：神奈川大学横浜キャンパス17号館　215会議室
■報告①：「呉越神歌の文化史意義—祓いの儀礼からみた—」
顧希佳（杭州師範学院　教授）
②：「追儺儀礼における方相氏の役割の変化」
アレクサンドル・グラ（立命館大学　専任講師）
■コメンテーター：廣田律子（神奈川大学　教授）
■企画・主催：外国語学研究科中国言語文化専攻

非文字資料研究 No.8

発行日　第8号　2005年6月30日発行
編集・発行　神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
Kanagawa University 21st Century COE Program
Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies
〒221-8686　横浜市神奈川区六角橋3-27-1
■Tel.045-481-5661　■Fax.045-491-0659　■URL http://www.himoji.jp